

恋人との別れが恋愛観とその後の 恋愛行動に及ぼす影響

中村 雅彦

(教育心理学研究室)

藤本 真未

(愛媛大学大学院教育学研究科)

(平成13年5月24日受理)

The influences of breakup from a lover on the view of romantic relationships and the following romantic behavior

Masahiko NAKAMURA and Manami FUJIMOTO

問題と目的

従来の親密な対人関係に関する研究では、対人関係の形成及び発展過程に関する研究に比べ、崩壊過程を主題にした研究はあまり行われてこなかった。しかし近年、特に恋愛関係の崩壊時における感情や行動に焦点を当てた研究が行われるようになりつつある (Cf., 諸井・中村・和田, 1999)。例えば、大坊 (1988) は恋人との別れの調査で、女性が別れの主導権を握っていることを見出した。また、飛田 (1997) は愛情の程度と別れたときの心理的反応を調査し、愛情が深かったほど男性ではネガティブな強い情動や否認が生じ、女性では罪悪感を覚えやすいことを明らかにした。関係の崩壊を行動という側面からとらえた研究では、和田 (2000) が関係崩壊時の対処行動について、男女差があることを見出している。すなわち、女性では関係が進展するほど説得・話し合い行動を多く行い、関係の崩壊を回避しようとするのに対し、男性は崩壊という事態そのものから逃避しようとする。崩壊後の行動についても同様に性差が見られた。さらに、飛田 (1992) は失恋後の行動を調査し、女性では情緒的落ち込みが大きいほど回顧的な行動を多く行うのに対し、男性は回顧行動に加えて相談行動、発散行動など女性よりも多様な行動を行うことが明らかになった。

このように、関係崩壊の研究は増えつつあるものの、崩壊の経験から次の恋愛が発展する間に個人がどのように変容するかといった研究は依然として少ない。この問題に関連する資料としては堀毛 (1994) の研究があげられる。堀毛は過去の恋愛経験と社会的スキルの関連について調査を行っている。その結果、男性では過去の失恋を通して自信を得た場合、多くのスキル

が向上することが見出された。つまり、関係崩壊時の情動や崩壊過程によってスキルが変化するとはいえるが、スキルだけでなく関係のあり方に関する価値観も変化すると考えられる。

そこで、本研究では恋愛観に注目したい。すなわち、関係崩壊の過程や崩壊時の情動によって恋愛観が変化すると考えられる。また、恋愛観を変化させるものとして、過去の恋愛行動にも着目する必要があるだろう。人はある行動を行い、その行動がもたらした結果を受けてその行動が関係の進展にとって望ましいか、そうでないかを判断する。

このような判断は関係進展時だけでなく、関係崩壊後に関係全体を振り返る際にも行われると考えられる。このように、様々な恋愛経験から恋愛観が変化し、現在の交際ではその恋愛観に基づいた行動や交際を行っているとは予想されるだろう。つまり、恋愛観を媒介とした恋愛行動や交際状況の変容プロセスの作業モデルが想定できる。この作業モデルを本研究では恋愛観媒介モデルと呼ぶことにする。

図のように、過去の恋愛行動が現在の恋愛行動に直接影響を持つことも考えられる。しかし、この作業モデルで注目されるべき点は、ある恋愛から他の恋愛への移り変わりではこの恋愛観を媒介としたサイクルが繰り返されるのではないかと、ということにある。このとき、ある人は過去の学習に基づいて恋愛観が変化して過去とは対照的な行動様式が生じるであろう（対比のパターン）。また、ある人は過去の経験が特定の恋愛観を強化して以前と同じ行動を繰り返すかもしれない（反復のパターン）。

対人関係は基本的に自他の相互作用過程として位置づけられるため、交際相手が変わることで、それぞれ異なった恋愛行動が見られ、関係をまたがった連関は生じにくいと考えることもできよう。しかし、過去の恋愛における失敗経験や別れの状況における葛藤経験が個人の価値に影響を与え、そのことが次の交際相手の選択、交際相手に対する恋愛行動のパターンに一定の方向づけを及ぼす可能性も看過できない。それは特に、関係スキルの向上という形で、過去よりも現在の建設的、発展的な恋愛行動の生起を促すであろう。逆に、過去の恋愛経験の教訓が活かされることなく、再び同じような破壊的行動パターンの反復が生じる可能性もある、ということである。

以上の議論から、本研究では、恋愛観媒介モデルに従って過去の恋愛行動、恋愛観、現在の恋愛行動についての関連を検討していくことを目的とする。

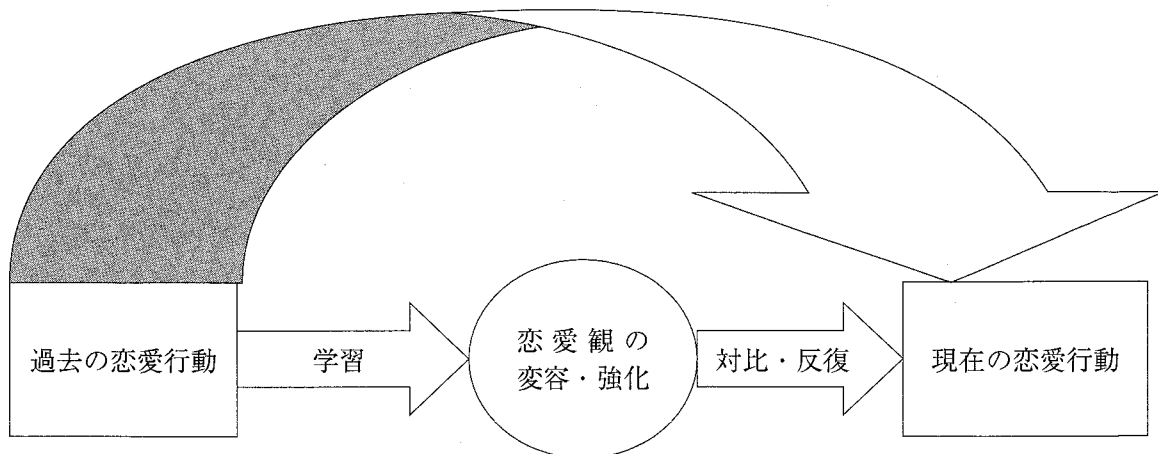


Fig. 1 恋愛観媒介モデル

方 法

1. 調査対象

調査対象は、国立大学大学生で、男性117名、女性190名、計307名である。

2. 調査期日

調査は大学の講義時間内に行われた。調査期日は平成12年6月13日と6月15日である。調査に要した時間は、20～30分であった。

3. 手続き

調査は講義時間内に調査用紙を配布し、教示の後に回答する手続きをとった。教示の際には、個人の結果のプライバシーは厳守すること、結果は全て集団的データとして集計し個人的データは扱わないこと、できるだけありのままに答えることを教示した。質問紙は、調査を行った講義の時間内に回収した。

4. 質問紙の構成

質問紙は、フェイスシート、恋愛行動尺度、恋愛行動が関係に及ぼす影響尺度、恋愛観尺度から構成されている。

(1) フェイスシート

フェイスシートでは、まず被験者の年齢、性別、交際した異性の有無について回答を求めた。交際した異性の有無については、以下の4グループのいずれに当てはまるかについて4件法で尋ねた。「1. 過去にはいたが、現在はいない」、「2. 過去にもおり、現在は別の異性と交際している」、「3. 過去はいないが、現在はいる」、「4. 交際経験は全くない」である。

この質問において1と答えた回答者には、過去の交際相手についての質問に回答を求めた。まず相手との間柄について、「1. BF (GF)」、「2. 異性の親友」、「3. 恋人」、「4. 最愛の人」、「5. 婚約者」の5件法で、そして交際が終わった時期、継続期間を尋ねた。次に別れについて、別れの状況と別れたときの感情について質問した。別れの状況では、別れの原因と主導権について、「1. 自分」、「2. どちらかという自分」、「3. どちらでもない」、「4. どちらかという相手」、「5. 相手」、「6. 両方」の6件法で尋ねた。また、別れの責任と恋愛への熱中度について、「1. 自分」、「2. どちらかという自分」、「3. どちらでもない」、「4. どちらかという相手」、「5. 相手」の5件法で質問した。別れたときの感情では、ショック、罪悪感、悲しみ、あきらめ、怒り、情けなさ、憎しみといったネガティブ感情を、「1. 全く感じなかった」、「2. あまり感じなかった」、「3. どちらでもない」、「4. 少し感じた」、「5. 非常に感じた」の5件法で回答を求めた。また、せいせいした、安堵したといったポジティブ感情についても同様に5件法で質問した。

交際異性の有無に関する質問において2と答えた回答者については、1と答えた者と同様に過去の交際相手についての質問に加えて、現在の交際相手についても回答を求めた。質問項目としては、過去と同様に相手との間柄と継続期間についての質問と共に、交際の状況について

の質問を行った。まず交際を切り出したのはどちらか、「1. 自分」「2. どちらかという自分」、「3. どちらでもない」、「4. どちらかという相手」、「5. 相手」、「6. 両方」の6件法で、次に恋愛の熱中度について、過去と同様の5件法で回答を求めた。

交際異性の有無に関する質問で3と答えた回答者は、現在の交際相手についてのみ、2と答えた人と同様に質問を行った。なお、4と答えた回答者については、質問は行わなかった。

(2) 恋愛行動

質問紙Ⅰは、過去の交際相手との交際の中で、どのような恋愛行動をどの程度行ったか、またその行動の程度が関係にどう影響を及ぼしたかについての質問である。質問紙Ⅱでは、現在の交際相手について過去と同様の質問を行った。恋愛行動については、松井(1990)が作成した恋愛行動の30項目と、飛田(1991)の調査で得られた恋愛行動の中から、現在の大学生が行っていると考えられる項目を選び出した。「友人や勉強の話をする」といった友愛的会話、「個人的な悩みを打ち明ける」といった自己開示、「性交する」といった性行動、「相手の部屋を訪問する」「相手の部屋に泊まった」といった訪問・宿泊行動、「恋人として友人に紹介する」といった紹介行動、「特別な用がないのに会いに行く」といったつながりを求める行動、「自分たちの結婚の話をする」といった婚約行動などである。

これらの恋愛行動は、すべて関係に対してポジティブに影響すると考えられる。そこで本研究では、恋愛行動が関係に与えるネガティブな影響についても検討するため、関係にネガティブな影響を与えると考えられる行動を独自の項目として加えた。「待ち合わせの時間に遅れる」、「友達との約束を優先する」、「うそをつく」、「前の彼(女)と比べる」、気分によって態度を変える、「浮気をする」、「別れを切り出す」、「恩着せがましいことを言う」などである。以上のことから61項目の恋愛行動について、それぞれの行動を行った程度を「1. まったくない」、「2. めったにない」、「3. ときどきある」、「4. かなりある」、「5. 非常にある」の5件法で質問した。また、行動の程度が関係に及ぼす影響について、「1. 全く好ましくない」、「2. あまり好ましくない」、「3. どちらでもない」、「4. やや好ましい」、「5. 非常に好ましい」の5件法で回答を求めた。質問Ⅰについては、フェイスシートの恋人の有無の質問で1または2と答えた人に回答を求め、質問Ⅱは同様の質問で2または3と答えた人に回答を求めた。

(3) 恋愛観

質問3は、どのような恋愛観を持っているかという質問である。恋愛の類型を測る尺度としては、松井(1990)が作成したLee's Love Type Scale 2nd Version (LETS-2)が挙げられる。この尺度を恋愛に関する価値観を測る尺度となるように各項目の文体を再構成した。例えば、エロス項目では「彼(女)と私は会うとすぐにお互いひかれあった。」を「恋愛とは、会うとすぐにお互いがひかれあうものである。」とした。ストーゲイ項目では、「長い友人づきあいを経て、彼(女)と恋人になった。」を「恋愛では、長い友人づきあいを経て恋人になる方がよい。」とした。ルダス項目では、「彼(女)とはあまり深入りせず、すっきりした関係でありたい。」を「恋愛では、相手とはあまり深入りせず、すっきりした関係である方がよい。」とした。アガペ項目では、「私は彼(女)のためなら、死ぬことさえも恐れない。」を「恋愛では、相手のためなら死ぬことさえも恐くないものだ。」とした。マニア項目では、「彼(女)と

ケンカをすると、不安や心配でやつれてしまう。」を「恋愛では、相手とケンカをすると、不安や心配でやつれてしまうものだ。」とした。このようにして作成した61項目について、「1. 全く思わない」、「2. あまり思わない」、「3. どちらでもない」、「4. ややそう思う」、「5. とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。質問Ⅲに関しては、全ての人に質問を行った。

結 果

1. 度数分析

Table 1 より、調査対象の307名のうち、有効回答率は86.3%であり、男性95名、女性170名、計265名であった。交際の有無について、「1. 過去にはいたが、現在はいない」と答えた者は99名で全体の37%、「2. 過去にもおり、現在は別の異性と交際している」と答えた者は87名で全体の33%、「3. 過去にはいないが、現在はいる」と答えた者は23名で全体の9%、「4. 交際経験は全くない」と答えた者は56名で全体の21%であった。1または2と答えた者で、過去の交際相手との間柄を「1. BF (GF)」と答えた者は67名で全体の36%、「2. 異性の親友」と答えた者は9名で全体の5%、「3. 恋人」と答えた者は104名で全体の56%、「4. 最愛の人」と答えた者は5名で全体の3%、「5. 婚約者」と答えた者はいなかった。また、2または3と答えた者で、現在の交際相手との間柄を「1. BF (GF)」と答えた者は14名で全体の13%、「2. 異性の親友」と答えた者は4名で全体の4%、「3. 恋人」と答えた者は74名で全体の67%、「4. 最愛の人」と答えた者は18名で全体の16%、「5. 婚約者」と答えた者はいな

Table 1 フェイスシート項目の度数分析表

年 齢	M SD N	19.92 1.19 265
交際した人数	M SD N	2.19 2.01 263
交 際 し た 異 性 の 有 無	1 2 3 4 Total	N 有効パーセント 99 37.4 87 32.8 23 8.7 56 21.1 265 100.0
過 去 の 相 手 と の 間 柄	1 2 3 4 Total	N 有効パーセント 67 36.2 9 4.9 104 56.2 5 2.7 185 100.0
過去の継続期間	M SD N	8.71 9.86 184
別れた理由	1 2 3 4 5 6 Total	N 有効パーセント 35 18.8 45 24.2 32 17.2 17 9.1 14 7.5 43 23.1 186 100.0
別れの主導権	1 2 3 4 5 6 Total	52 28.0 22 11.8 34 18.3 20 10.8 45 24.2 13 7.0 186 100.0
別れの責任	1 2 3 4 5 Total	31 16.7 47 25.3 80 43.0 22 11.8 6 3.2 186 100.0
過去の熱中度	1 2 3 4 5 Total	19 10.2 38 20.4 57 30.6 47 25.3 25 13.4 186 100.0
現在の間柄	1 2 3 4 Total	14 12.7 4 3.6 74 67.3 18 16.4 110 100.0
現在の継続期間	M SD N	17.85 16.09 110
現在の告白	1 2 3 4 5 6 Total	N 有効パーセント 27 24.5 8 7.3 10 9.1 17 15.5 39 35.5 9 8.2 110 100.0
現在の熱中度	1 2 3 4 5 Total	6 5.5 25 22.7 53 48.2 19 17.3 7 6.4 110 100.0

Table 2 過去の恋愛行動の主成分分析と信頼性分析

質問項目	因子負荷量
34. 性交する	.84
30. キスしたり, 抱き合ったりする	.82
33. ベッティングをする	.82
19. 手を握ったり腕を組んだりする	.66
36. 自分の部屋に相手が泊まった	.65
35. 相手の部屋に泊まった	.64
29. 自分の部屋に招く	.61
18. ふたりでデートする	.60
12. 肩をたたいたり, ちょっと体に触れる	.50
28. 相手の部屋を訪問する	.49
15. 特別な用がないのに会いに行く	.48
31. 恋人として友人に紹介する	.40
固有値	12.23
寄与率	20.06
累積寄与率	20.06
信頼性	.90
57. 婚約ではないが, 結婚しようと約束する	.72
55. 結婚してほしいと相手に求める	.67
56. 結婚してほしいと相手に求められる	.66
4. 個人的な悩みを打ち明ける	.62
54. 自分たちの結婚の話をする	.62
6. 人に見せたくない面を相手に見せる	.57
5. 個人的な悩みを打ち明けられる	.55
11. プレゼントを贈られる	.55
7. 人に見せたくない面を見せられる	.52
10. プレゼントを贈る	.50
12. 肩をたたいたり, ちょっと体に触れる	.40
固有値	4.38
寄与率	7.18
累積寄与率	27.23
信頼性	.87
41. 気分によって態度を変える	.65
21. 自分の行動をいちいち聞かれる	.60
42. 気分によって態度を変えられる	.57
23. やきもちをやかれる	.55
37. うそをつく	.54
43. 相手と口げんかする	.54
14. 特別な用がないのに電話がある	.49
40. 前の彼(女)と比べられる	.48
26. 友達との約束を優先する	.48
16. 特別な用がないのに相手が会いに来る	.46
39. 前の彼(女)と比べられる	.41
固有値	3.20
寄与率	5.24
累積寄与率	32.47
信頼性	.80
52. 相手の実家を訪問する	.75
51. 相手の親に紹介される	.74
50. 親に紹介する	.72
53. 相手の実家に招く	.72
32. 恋人として相手の友人に紹介される	.57
31. 恋人として友人に紹介する	.49
固有値	2.97
寄与率	4.87
累積寄与率	37.34
信頼性	.87
22. やきもちをやく	.62
20. 相手の行動をいちいち聞く	.60
27. 友人との約束を優先される	.57
48. 恩着せがましいことを言う	.47
47. 別れを切り出される	.46
25. 待ち合わせの時間に相手が遅れる	.44
45. 浮気をされる	.43
49. 恩着せがましいことを言われる	.42
38. うそをつかれる	.42
13. 特別な用がないのに電話する	.40
固有値	2.49
寄与率	4.09
累積寄与率	42.43
信頼性	.72
3. お互いの家族の話をする	.57
1. 友人や勉強の話をする	.47
固有値	2.29
寄与率	3.75
累積寄与率	45.18
信頼性	.52

Table 3 現在の恋愛行動の主成分分析と信頼性分析

質問項目	因子負荷量
18. ふたりでデートする	.71
6. 人には見せたくない面を相手に見せる	.69
7. 他人の人には見せない面を見せられる	.68
2. 子どもの頃の話をする	.68
19. 手を握ったり腕を組んだりする	.67
30. キスをしたり, 抱き合ったりする	.67
4. 個人的な悩みを打ち明ける	.67
34. 性交する	.66
10. プレゼントを贈る	.65
3. お互いの家族の話をする	.65
5. 個人的な悩みを打ち明けられる	.64
15. 特別な用がないのに会いに行く	.63
12. 肩をたたいたり, ちょっと体に触れる	.63
16. 特別な用がないのに相手が会いに来る	.63
33. ベッティングをする	.62
54. 自分たちの結婚の話をする	.62
11. プレゼントを贈られる	.61
57. 婚約ではないが, 結婚しようと約束する	.61
56. 結婚してほしいと相手に求められる	.57
31. 恋人として友人に紹介する	.57
21. 自分の行動をいちいち聞かれる	.57
55. 結婚してほしいと相手に求める	.56
23. やきもちをやかれる	.55
32. 恋人として相手の友人に紹介される	.55
22. やきもちをやく	.53
20. 相手の行動をいちいち聞く	.52
1. 友人や仕事の話をする	.48
9. 仕事や勉強を手伝ってもらう	.48
13. 特別な用がないのに電話する	.46
8. 仕事や勉強を手伝ってやる	.44
固有値	14.0
寄与率	22.94
累積寄与率	22.94
信頼性	.94
46. 別れを切り出す	.68
38. うそをつかれる	.63
49. 恩着せがましいことを言われる	.63
48. 恩着せがましいことを言う	.55
37. うそをつく	.50
42. 気分によって態度を変えられる	.49
43. 相手と口げんかする	.48
41. 気分によって態度を変える	.48
60. 相手を殴る	.48
45. 浮気をされる	.44
44. 浮気をする	.44
固有値	4.58
寄与率	7.51
累積寄与率	30.45
信頼性	.78
51. 相手の親に紹介される	.72
52. 相手の実家を訪問する	.66
50. 親に紹介する	.65
53. 相手の実家に招く	.54
56. 結婚してほしいと相手に求められる	.45
54. 自分たちの結婚の話をする	.45
58. 相手の実家に泊まる	.43
57. 婚約ではないが, 結婚しようと約束する	.43
55. 結婚してほしいと相手に求める	.41
固有値	3.38
寄与率	5.54
累積寄与率	35.99
信頼性	.88

Table 4 恋愛観の主成分分析と信頼性分析

質 問 項 目	因子負荷量
26. 恋愛では、相手はいつも自分のことだけ考えていて欲しいものである。	.65
16. 恋愛では、気がつくといつも相手のことを考えてしまうものだ。	.65
32. 恋愛では、相手からの愛情がほんのわずかでも欠けていると感じたときには、悩み苦しむものである。	.64
23. 恋愛では、相手は自分だけのものであって欲しいと思うものだ。	.63
27. 恋愛では、相手と一緒にいると自分たちが本当に愛し合っていることを実感するものだ。	.61
17. 恋愛では、相手と自分は互いに、本当に理解すべきである。	.55
19. 恋愛では、相手が自分以外の人と親しそうにしていると、気になってしかたないものである。	.54
12. 恋愛では、相手と自分はお互いに結びついていると感じるものだ。	.53
35. 恋愛では、相手と一緒にいると夢ごごちになるものだ。	.53
42. 恋愛では、相手と一緒にいると甘くやさしい雰囲気になるものだ。	.52
36. 恋愛では、相手のことを思うと強い感情がこみ上げてきてどうしようもなくなるものだ。	.51
39. 恋愛では、お互いに出会うためにこの世に生まれてきたような気がするものだ。	.50
31. 恋愛では、相手とケンカすると、不安や心配でやつれてしまうものだ。	.48
11. 恋愛では、相手が他の人とつき合っているのではないかと思うと落ち着いていられなくなるものだ。	.46
8. 恋愛では、相手が自分のことを気にかけてくれないとき、気がめいってしまうものだ。	.45
40. 恋愛では、相手との愛を大切にしたいと気を使うのが好ましい。	.42
29. 恋愛では、相手のためならできないこともできるようにしてみせるべきだ。	.41
20. 恋愛では、相手と一緒にいると恋愛小説の主人公になったような気持ちになるものである。	.40
	固有値 8.61
	寄与率 15.11
	累積寄与率 15.11
	信頼性 .87
50. 恋愛において、恋人を選ぶときには、その人が自分の経歴にどう影響するかを考える方がよい。	.77
54. 恋愛において、恋人を選ぶときには、その人に経済力があるかどうかを考える方がよい。	.75
51. 恋愛において、恋人を選ぶときには、その人は将来性があるかどうかを考えた方がよい。	.74
53. 恋愛において、恋人を選ぶときには、その人の学歴や育ち(家柄)が自分と釣り合っているかどうかを考えた方がよい。	.67
47. 恋愛において、恋人を選ぶときには、その人が自分の家族にどう受け取られるかを一番に考えた方がよい。	.67
49. 恋愛において、恋人を選ぶのに重要な要素は、その人がよい父親になるかどうかである。	.63
55. 恋愛において、恋人を選ぶときには、その人との付き合いが自分の格を下げないかどうかを考える方がよい。	.61
46. 恋愛において、恋人を選ぶ前に、自分の人生を慎重に計画する方がよい。	.60
	固有値 5.29
	寄与率 9.29
	累積寄与率 24.40
	信頼性 .86
57. 最も満足する恋愛関係とは、よい友情から発展したものだと思う。	.79
52. 最良の愛は、長い友情の中から育つ方がよい。	.78
34. 恋愛では、相手とは友人関係から自然に恋人関係へと発展させた方がよい。	.74
41. 恋愛では、長い友人づきあいを経て相手と恋人になる方がよい。	.70
	固有値 3.29
	寄与率 5.77
	累積寄与率 30.17
	信頼性 .88
44. 恋愛では、相手のためならどんなことも我慢するべきである。	.67
38. 恋愛では、たとえ相手からまったく愛されなくても、自分は相手を愛するべきである。	.55
25. 恋愛では、相手のためなら死ぬことさえも恐くないものだ。	.52
7. 自分自身の幸福よりも、相手の幸福が優先しないと幸せになれないと思う。	.52
37. 恋愛では、どんなにつらくとも相手に対しいつでも優しくしてあげる方がよい。	.51
4. 恋愛では、相手が苦しむくらいなら、自分が苦しんだ方がましだと思う。	.48
10. 恋愛では、相手の望みをかなえるためなら自分自身の望みはいつでも喜んで犠牲にできると思う。	.47
	固有率 2.75
	寄与率 4.82
	累積寄与率 34.98
	信頼性 .74

かった。

2. 主成分分析・信頼性分析の結果

質問紙調査で得られた過去の恋愛行動，現在の恋愛行動，恋愛観についての主成分分析と信頼性分析を行った。

(1) 過去の恋愛行動

過去の恋愛行動61項目において主成分分析を行い，バリマックス回転を実行したところ，性行動因子，婚約行動因子，自分の関係破壊行動因子，家との付き合い行動因子，相手の関係破壊行動因子，友愛的会話行動因子の6因子が抽出された。

(2) 現在の恋愛行動

現在の恋愛行動61項目について，主成分分析を行い，バリマックス回転を行ったところ，関係構築行動因子，関係離脱行動因子，婚約・家との付き合い行動因子の3因子が抽出された。

(3) 恋愛観

恋愛観尺度57項目について，主成分分析を行い，バリマックス回転を行ったところ，依存的熱愛因子，現実的愛因子，友愛因子，献身的愛因子の4因子が抽出された。LETS-2で設定されている項目類型との対応を考えるならば，依存的熱愛因子はエロスとマニアの結合した形に，現実的愛因子はルダスとプラグマの結合した形になっている。友愛因子及び献身的愛因子はそれぞれストーゲ，アガペにほぼ項目が対応しているといえる。

3. 重回帰分析の結果

恋愛観変容モデルに沿って，以下に示すような3パターンの重回帰分析を行った。

(1) 過去の恋愛行動が恋愛観に及ぼす影響

過去の恋愛行動6因子，交際人数，過去の間柄，継続期間，別れの原因，主導権，責任，過去の熱中度，別れのネガティブ感情，ポジティブ感情，過去の影響度の16項目を独立変数と

Table 5 過去の恋愛行動を独立変数とし恋愛観を従属変数とした重回帰分析

恋愛観	R ²	F	性行動	婚約行動	自分の関係破壊行動	家との付き合い行動	相手の関係破壊行動	友愛的会話	交際人数	過去の間柄	過去の継続期間	別れた原因	別れ的主导権	別れ責任	過去の熱中度	ネガティブ感情	ポジティブ感情	過去の影響度
依存的熱愛	.04	6.56					.20*											
現実的愛	.08	7.74											.25**				.25**	
友愛	.06	6.24	-.24**												.17*			
献身的愛	.12	5.20						-.21**	.24**	.19*	-.17*							-.20*

し、恋愛観4因子を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 5)。

まず、依存的熱愛因子において、相手の関係破壊行動 (Beta=.20, p<.05) が正の影響を及ぼしていた (R²=.04, F_(1,153)=6.56, p<.05)。すなわち、過去の交際において相手の関係破壊行動が多いほど、依存的熱愛の傾向が高くなるといえる。

また、現実的愛因子においては、別れのポジティブ感情 (Beta=.25, p<.01)、別れの主導権 (Beta=.25, p<.01) が正の影響を及ぼしていた (R²=.08, F_(2,155)=7.74, p<.01)。すなわち、別れの際にポジティブ感情が高く、別れの主導権が自分になかったと認知するほど、現実的な愛の傾向が高くなるといえる。

第3に、友愛因子においては、性行動 (Beta=-.24, p<.01) が負の影響を、別れのネガティブ感情 (Beta=.17, p<.05) が正の影響を及ぼしていた (R²=.06, F_(2,155)=6.24, p<.01)。すなわち、過去の交際で性行動が多いと、友情的な愛の傾向が低くなるが、別れの際にネガティブ感情が高かった場合は友情的な愛の傾向が高くなるといえる。

第4に、献身的愛因子においては、交際した人数 (Beta=-.21, p<.01)、過去の影響度 (Beta=-.20, p<.05)、分かれた原因 (Beta=-.17, p<.05) が負の影響を、過去の間柄 (Beta=.24, p<.01)、過去の継続期間 (Beta=.19, p<.05) が正の影響を及ぼしていた (R²=.12, F_(5,151)=5.20, p<.001)。すなわち、別れた原因が相手にあった場合、また交際人数が増すほどに献身的愛の傾向は低くなるが、過去の交際が恋人以上の深い関係であったり、継続期間が長かった場合、また過去の交際が好ましいものでなかった場合は献身的愛の傾向が高くなる。

以上の結果から、様々な恋愛行動が恋愛観に影響を及ぼしていることが分かる。

(2) 恋愛観が現在の恋愛行動に及ぼす影響

恋愛観4因子を独立変数とし、現在の恋愛行動3因子、現在の間柄、継続期間、告白の相手、熱中度、影響度の8項目を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った

Table 6 恋愛観を独立変数とし現在の恋愛行動を従属変数とした重回帰分析

現在の恋愛行動 交際状況	R ²	F	依存的熱愛	現実的愛	友愛	献身的愛
関係構築行動	.10	12.64	.33 **			
関係離脱行動						
結婚・家との 付き合い行動	.05	6.71				.24 *
現在の間柄	.09	6.24	.31 **		-.23 *	
現在の継続期間						
現在の告白						
現在の熱中度	.03	4.47	-.20 *			
現在の影響度	.13	17.07	.38 ***			

(Table 6)。ここで、従属変数となる恋愛行動のカテゴリー別の分析結果を以下に示す。なお、恋愛行動のカテゴリーは、a. 現在の建設的な恋愛行動：関係構築行動、婚約・家との付き合い行動、b. 現在の破壊的な恋愛行動：関係離脱行動、c. 現在の交際状況：間柄、継続期間、告白、熱中度、影響度の3カテゴリーに研究者によって便宜上分類された。

a. 現在の建設的な恋愛行動の規定条件

①現在の関係構築行動……依存的熱愛 (Beta=.33, $p<.01$) が正の影響を及ぼしていた ($R^2=.10$, $F_{(1,106)}=12.64$, $p<.01$)。すなわち、依存的熱愛の傾向が高いほど、現在の交際において関係構築行動が多い。

②現在の婚約・家との付き合い行動……献身的愛 (Beta=.24, $p<.05$) が正の影響を及ぼしていた ($R^2=.05$, $F_{(1,106)}=6.71$, $p<.05$)。すなわち、献身的愛の傾向が高いほど、現在の交際において婚約・家との付き合い行動が多い。

c. 現在の交際状況の規定条件

①現在の相手との間柄……依存的熱愛 (Beta=.31, $p<.01$) が正の影響を、友愛 (Beta=-.23, $p<.05$) が負の影響を及ぼしていた ($R^2=.09$, $F_{(1,106)}=6.24$, $p<.01$)。すなわち、依存的熱愛の傾向が高いほど現在の交際では恋人以上の深い関係となるが、友愛傾向が高いほど浅い関係にとどまっている。

②現在の交際の熱中度……依存的熱愛 (Beta=-.20, $p<.05$) が負の影響を及ぼしていた ($R^2=.03$, $F_{(1,106)}=4.47$, $p<.05$)。すなわち、依存的熱愛の傾向が高いほど、現在の交際では自分の方が熱中していると認知している。

③現在の交際の好ましさ……依存的熱愛 (Beta=.38, $p<.001$) が正の影響を及ぼしていた ($R^2=.13$, $F_{(1,103)}=17.07$, $p<.001$)。すなわち、依存的熱愛の傾向が高いほど、現在の交際において好ましさが高い。

(3) 過去の恋愛行動が現在の恋愛行動に及ぼす影響

過去の恋愛行動6因子、交際人数、過去の間柄、継続期間、別れの原因、主導権、責任、過去の熱中度、別れのネガティブ感情、ポジティブ感情、過去の影響度の16項目を独立変数とし、現在の恋愛行動3因子、現在の間柄、継続期間、告白の相手、熱中度、影響度の8項目を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。カテゴリー別に分析した結果を以下に示す (Table 7)。

a. 現在の建設的な恋愛行動の規定条件

①現在の関係構築行動……過去の相手の関係破壊行動 (Beta=.29, $p<.05$) が正の影響を、過去の間柄 (Beta=-.23, $p<.05$) が負の影響を及ぼしていた ($R^2=.09$, $F_{(2,70)}=4.49$, $p<.05$)。すなわち、過去に相手の関係破壊行動が多かった場合や浅い関係であった場合、現在の交際では関係構築行動が多くなるといえる。

②現在の婚約・家との付き合い行動……別れた原因 (Beta=-.30, $p<.01$) が負の影響を、過去の家との付き合い行動 (Beta=.29, $p<.01$) が正の影響を及ぼしていた ($R^2=.17$, $F_{(2,70)}=8.40$, $p<.01$)。すなわち、別れの原因が自分にあると認知し、過去の交際で家との付

Table 7 過去の恋愛行動を独立変数とし現在の恋愛行動を従属変数とした重回帰分析

現在の恋愛行動・交際状況	R ²	F	性行動	婚約行動	自分の関係破壊行動	家との付き合い行動	相手の関係破壊行動	友愛的会話	交際人数	過去の間柄	過去の継続期間	別れた原因	別れの主導権	別れの責任	過去の熱中度	ネット感情	ガタイ感情	ポジティブ感情	過去の影響度	
関係構築行動	.09	4.49					.29*			-.23*										
関係離脱行動	.13	6.38			.33**									-.23*						
婚約・家との付き合い行動	.17	8.40				.29**						-.30**								
現在の間柄	.21	7.37								.34**	-.26*		-.27*							
現在の継続期間																				
現在の告白	.07	6.16										.28*								
現在の熱中度																				
現在の影響度	.21	7.36												.24*				.27*	.53***	

き合い行動が多いと、現在の交際では婚約・家との付き合い行動が多くなるといえる。

b. 現在の破壊的な恋愛行動の規定条件

①現在の関係離脱行動……過去の自分の関係破壊行動 (Beta=.33, p<.01) が正の影響を、別れの責任 (Beta=-.23, p<.05) が負の影響を及ぼしていた (R²=.13, F_(2,70)=6.38, p<.01)。すなわち、過去に自分の関係破壊行動が多い場合、また別れの責任が自分にあった場合、現在の交際では関係離脱行動が多くなるといえる。

c. 現在の恋愛関係の規定条件

①現在の相手との間柄……過去の相手との間柄 (Beta=.34, p<.01) が正の影響を、別れの主導権 (Beta=-.27, p<.05)、過去の継続期間 (Beta=-.26, p<.05) が負の影響を及ぼしていた (R²=.21, F_(3,69)=7.37, p<.001)。すなわち、過去の交際が恋人以上の深い関係であった場合や、別れの主導権を自分が握っていた場合、過去の継続期間が短かった場合においては、現在の交際では恋人以上の深い関係に至っていると見える。

②現在の告白……別れた原因 (Beta=.28, p<.05) が正の影響を及ぼしていた (R²=.07, F_(1,71)=6.16, p<.05)。すなわち、過去の交際で別れた原因が相手にあった場合、現在の交際では自分から告白しないと見える。

③現在の交際の好ましさ……過去の交際の好ましさ (Beta=.53, p<.001)、別れのポジティブ

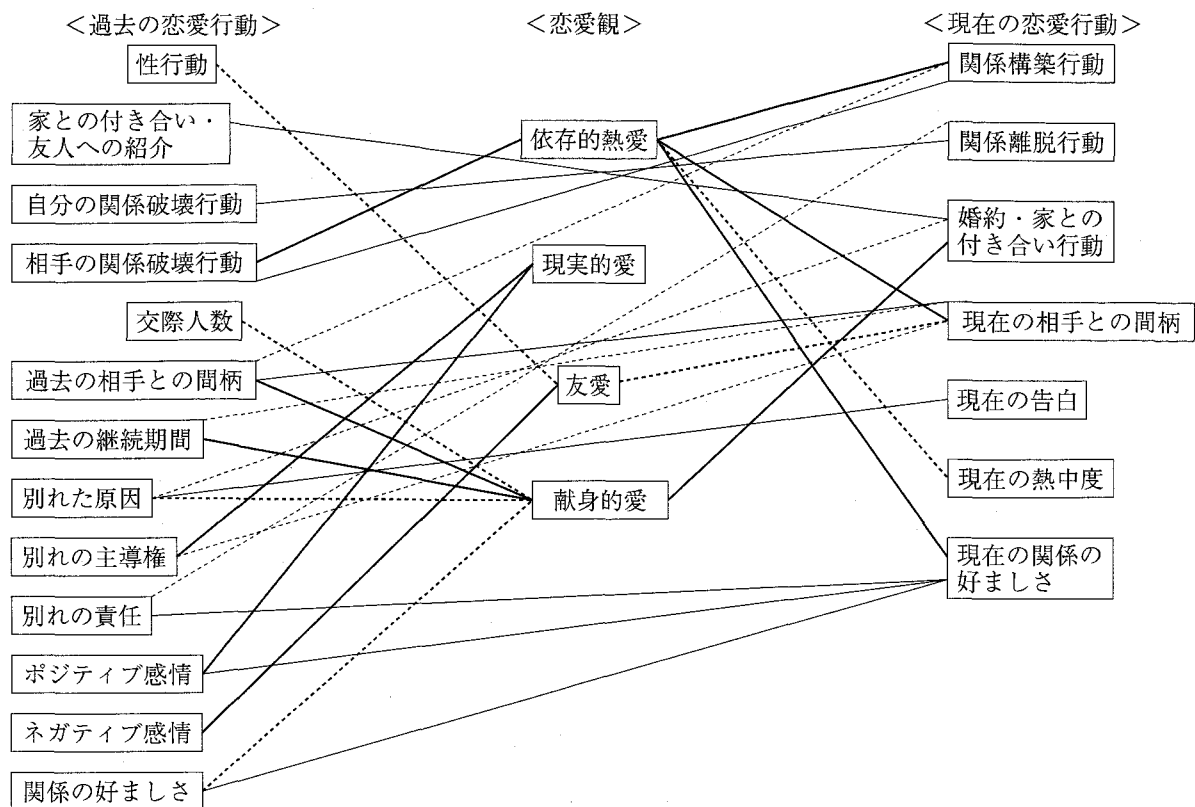


Fig. 2 過去の恋愛行動、恋愛観、現在の恋愛行動のパス解析の結果
注. 実線は正のパス係数、破線は負のパス係数を示す。

ブ感情 (Beta=.27, $p<.05$), 別れの責任 (Beta=.24, $p<.05$) が正の影響を及ぼしていた ($R^2=.21$, $F(3,68)=7.36$, $p<.001$)。すなわち、過去の交際が好ましい関係であった場合、現在でも好ましい交際を行っていると見える。また、逆に過去の交際で別れのポジティブ感情が高かった場合や、別れの責任が相手であった場合においても、現在の交際では好ましい関係を築いていると見える。

以上の結果から、過去の恋愛行動と現在の恋愛行動との間に様々な関連が見られた。そこで、3パターンの分析についてパス解析による検討を行った (Fig. 2)。その結果、依存的熱愛を媒介とした恋愛行動の変容が多く見られたものの、その他の恋愛観についてはあまり関連が見られなかった。つまり、恋愛観を媒介とした流れよりも過去の恋愛行動・別れの状況から直接に現在の恋愛行動への影響が及んでいることが分かる。

考 察

本研究では、過去の恋愛行動、恋愛観、現在の恋愛行動の関連について検討することを目的としている。ここでは、恋愛観媒介モデルに従って行った分析の結果を中心に考察していく。

1. 恋愛行動の構造について

恋愛行動の因子分析の結果、過去6因子、現在3因子が抽出された (Table 2, 3)。過去と現在を比較すると、過去では性行動や友愛的会話行動が独立した1つの因子を構成しているの

に対し、現在では性行動、自己開示行動、道具的支援行動、友愛的会話行動などが1つにまとまり、関係構築行動因子となった。また、過去では婚約行動と家との付き合い行動がそれぞれ独立した因子となっているのに対し、現在ではこの2因子が1つの因子となっている。このように、現在よりも過去の方が、恋愛行動が細分化されているといえる。

性行動、自己開示行動、道具的支援行動、友愛的会話行動などが1つにまとまり、関係構築行動因子となったことに関しては、これらの行動が関係を進展させる基本的な行動であると考えられる。過去の恋愛では、これらの恋愛行動が別れた後に関係を振り返ることによって細かく細分化されるのに対し、現在の交際では関係構築行動という大きな枠組みでとらえられるといえる。

2. 恋愛観の構造について

恋愛観の主成分分析の結果、4因子が抽出された (Table 4)。すなわち、6類型のうちのエロス項目、マニア項目が1つにまとまり、依存的熱愛因子となった。また、プラグマ項目、ストーゲイ項目、アガベ項目はそれぞれ1つの因子を構成し、現実的愛因子、友愛因子、献身的愛因子となった。ルダス項目は、どの因子にも含まれなかった。エロス項目とマニア項目が1つの因子となったことについては、次のようなことが考えられる。すなわち、現代の恋愛では、エロスやマニアの恋愛観が基本となっているということである。Lee (1988) では、エロス、ルダス、ストーゲイの3つが類型の基本であるとしている。これに対し、Lee (1974, 1977) の理論を追跡調査した松井 (1990) は、エロス、マニア、アガベが恋愛の類型の基本であると主張している。本研究の結果は、アガベが独立しているものの、松井の理論と類似した結果となった。従って、依存的熱愛は現代青年の基本的な恋愛観であるといえる。

3. 過去の恋愛行動、恋愛観、現在の行動の関連について

(1) 過去の恋愛行動と恋愛観

過去の恋愛行動と恋愛観の関連を明らかにするために、過去の恋愛行動を独立変数とし、恋愛観を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 5)。その結果、相手の関係破壊行動が依存的熱愛に正の影響を及ぼしており、過去の相手の関係破壊行動の多さによって学習し、依存的熱愛傾向が高まると考えられる。また、別れのポジティブ感情は現実的愛傾向に正の影響を及ぼしており、ポジティブ感情の高さは現実的愛傾向を強化したと考えられる。それに対して、別れの主導権が現実的愛傾向に正の影響を及ぼしており、別れの主導権を相手を持っていたことで学習し、現実的愛傾向へと変化したと考えられる。また、別れのネガティブ感情は友愛傾向に正の影響を及ぼしており、ネガティブ感情の高さから学習し、友愛傾向へと変化したと考えられる。過去の相手との間柄、継続期間は献身的愛に正の影響を及ぼしており、過去に親密で交際期間が長い交際を行った場合、献身的愛傾向が強化されるといえる。逆に、交際人数、別れた原因、関係の好ましさが献身的愛に負の影響を及ぼしており、交際人数が増すごとに、また別れた原因を相手が出した場合は、好ましい交際であった場合には、その反動として献身的愛傾向が低くなると考えられる。

(2) 恋愛観と現在の恋愛行動

恋愛観と現在の恋愛行動の関連を明らかにするために、恋愛観を独立変数とし、現在の恋愛行

動を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 6)。その結果、依存的熱愛が関係構築行動、現在の間柄、交際の好ましさに正の影響を、現在の熱中度に負の影響を及ぼしており、依存的熱愛傾向は現在の交際で関係構築行動を多くとり、熱中度が高く、深く好ましい関係を構築するといえる。また、友愛が現在の間柄に負の影響を及ぼしており、友愛傾向が高いと浅い関係であると考えられる。また、献身的愛は婚約・家との付き合い行動に正の影響を及ぼしており、献身的愛傾向の高さが婚約行動や家との付き合い行動を増加させるといえる。

(3) 過去の恋愛行動と現在の恋愛行動

過去の恋愛行動と現在の恋愛行動の関連を明らかにするため、過去の恋愛行動を独立変数とし、現在の恋愛行動を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 7)。その結果、2つのパターンで分類することができた。まず、過去の行動から特定の恋愛観が強化され、その恋愛観に沿った行動を繰り返し行っているパターンが見られた独立変数と従属変数の組み合わせは、以下の通りであった。まず、過去の自分の関係破壊行動が現在の関係離脱行動に正の影響を、別れの責任が負の影響を及ぼしていた。また、過去の婚約・家との付き合い行動が現在の家との付き合い行動に正の影響を及ぼしていた。この結果から、過去の親密さを求める建設的な行動が現在でも同様の行動を高めていることが分かる。逆に、過去の破壊的な行動が現在でも破壊的な行動を高めているともいえる。また、別れの状況と現在の交際状況の関連では、過去の間柄が現在の間柄に正の影響を及ぼしていた。さらに、過去の影響度、別れの責任が現在の影響度に正の影響を及ぼしていた。この結果から、過去の恋愛が深い関係の好ましい恋愛であった場合、次の恋愛でも親密な好ましい恋愛を行うといえる。また逆に、別れの責任が自分にあった場合、現在の恋愛もあまり好ましくない恋愛を繰り返しているといえる。

次に、過去の行動から恋愛観が変化し、新たな恋愛観に沿った行動を行っているパターンが見られた独立変数と従属変数の組み合わせは、以下の通りであった。まず、過去の相手の関係破壊行動が現在の関係構築行動に正の影響を、過去の間柄が負の影響を及ぼしていた。また別れた原因が現在の婚約・家との付き合い行動に負の影響を及ぼしていた。すなわち、過去が浅い関係で破壊的な行動が多く、別れの原因が自分にあるような恋愛であると、その経験から学習して親密性の高い建設的な恋愛を求め、それに従って行動する場合があると考えられる。また、逆に親密性の低い破壊的な恋愛観へと変化する場合もある。過去が建設的な行動の多い親密性の高い恋愛であると、その経験から学習して親密性の低い恋愛を求めるようになり、それに従って行動する場合があると考えられる。

また、別れの状況と現在の交際状況の関連では、まず過去の継続期間、別れの主導権が現在の間柄に負の影響を及ぼしていた。また、別れた原因が現在の告白に正の影響を及ぼしていた。また、別れのポジティブ感情が現在の関係の好ましさに正の影響を及ぼしていた。すなわち、過去の交際が継続期間が短く、別れた原因や主導権を自分が握っていた場合、また別れの際にポジティブ感情が高かった場合、その経験から学習して現在では自分から積極的に告白し、深い関係づくりや好ましい交際を行うと考えられる。また逆に、過去の経験から学習して破壊的な恋愛を行うパターンも考えられる。

これらの結果をもとに行ったパス解析では、依存的熱愛は現在の行動に様々な影響を及ぼし

ていたが、現実的愛、友愛、献身的愛に関しては、過去の行動との関連は見られるものの、現在の行動との関連がほとんど見られなかった。従って、恋愛観を媒介とした流れよりも過去の恋愛行動と現在の恋愛行動との関連が目立った。この結果について考察すると、次のようなことが考えられる。すなわち、本研究で扱った恋愛行動はより一般的で日常的に行われている行動が多く、恋愛観に影響を及ぼすほどのインパクトをもった対人的失敗や成功の経験が得られなかったのではないだろうか。また、過去の恋愛行動から、より一般化された価値観である恋愛観に対する影響よりも、同じ行動次元上で捉えることのできる現在の恋愛行動との相関が強く現れたということも考えられる。

4. 結論と今後の課題

本研究では、恋愛観変容のモデル (Fig. 1) に従って過去の恋愛行動、恋愛観、現在の恋愛行動についての関連を検討してきた。その結果、恋愛観媒介モデルの妥当性がある程度示されたといえる。さらに、過去の恋愛行動や別れの状況が恋愛観に変化をもたらし、現在の恋愛では新たな恋愛観に基づいて過去とは異なる恋愛行動が生じる対比のパターン、過去の恋愛行動や別れの状況が特定の種類の恋愛観を強化する方向に働いて、以前と同じ行動を現在の恋愛の中でも繰り返す反復のパターンも認められた。また、これに加え、過去の恋愛行動が直接現在の恋愛行動と関連を持つことも確認された。しかし、依存的熱愛以外の恋愛観を媒介とする影響はほとんど見られなかった。その原因は上述した通りであるが、その他の理由として、質問紙の構成や調査対象者の問題も挙げられる。今回の調査では、女性の回答者が多く、男性のサンプル数が少なすぎたため、男性に関しては十分な分析を行うことができなかった。従って、調査対象者の男女差が均等になるように考慮する必要がある。

また、質問紙の意見・感想の欄では、質問が長く、難しいので答えにくいという意見が多かった。また、交際の好ましさについては、恋愛行動を行った程度が関係にどの程度好ましく影響を及ぼしていたかを尋ねる質問であったが、恋愛行動そのものの好ましさを答えてしまった場合があり、質問項目数、記述方法や教示方法の見直しが必要である。

また、過去の恋愛行動、恋愛観はある特定の恋愛行動を強化したり、逆に抑制したりすることが考えられる。従って、今後はこれらをタイプ別に分類する必要がある。また逆に、恋愛行動の中には、同じ行動が建設的な恋愛に向かう場合と、破壊的な恋愛に向かう場合とがあるが、それには別れの原因や別れの際の感情などといった、別れ方が大きく影響していると考えられる。従って、今後は別れの際に恋人という契約を破棄する儀式的な行為に着目し、その儀式が恋愛観や恋愛行動にどのような影響を及ぼすのかについて類型化を試みる必要もあるだろう。

引用文献

- 大坊郁夫 1988 異性間の関係崩壊についての認知的研究 日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 64-65.
- 飛田 操 1991 青年期の恋愛行動の進展について 福島大学教育学部論集 教育・心理部門, 50, 43-53.
- 飛田 操 1992 親密な関係の崩壊時の行動特徴について 日本心理学会第56回大会発表論文集, 231.
- 飛田 操 1997 失恋の心理 松井豊(編) 悲嘆の心理 サイエンス社 Pp.205-218.
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- Lee, J. A. 1974 The styles of loving. *Psychology Today*, 1974, October, 43-51.
- Lee, J. A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 173-182.
- Lee, J. A. 1988 Love-Styles. In R. J. Sternberg & M. L. Barnes, (Eds.), *The psychology of Love*. New Haven: Yale University Press. Pp.38-67.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 諸井克英・中村雅彦・和田実 1999 親しさが伝わるコミュニケーション 金子書房
- 和田 実 2000 大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応 -性差と恋愛関係進展度からの検討- 実験社会心理学研究, 40, 38-49.

<付記>本研究は、藤本真未が平成12年度愛媛大学教育学部卒業論文として提出した資料に基づいて、再分析及び再構成を行ったものである。